

アメリカの“ビレッジ”視察を通して、地域生活支援について考えたこと
宮崎県立看護大学准教授 小笠原広実

最近、精神保健の分野では「リカバリー」という考え方が注目されてきています。精神の病を持つ人たちも、その人らしさを発揮して生き生きと生活していけることが、回復するということなのではないか、という考えです。それを実践しているアメリカ・ロサンゼルスにある“ビレッジ”という精神保健サービスセンターを訪ねてきました。精神の病を持つ方々が、仕事や住居を探したり生活上困っていることを相談にきたり、センターの職員が、病院や家街角などに出向いて支援を行っています。医師や看護師、心理療法士、ケースワーカーなどがチームを組んで相談にあたっているそうです。チームの中には、自らが精神の病の経験を持ち回復してきた人が含まれていて、同じチームの一員として活動しているのが特徴です。

“ビレッジ”というのは入所の施設ではなく幅広いサービスを行うセンターなのですが地下1階地上3階建ての立派なビルで、しかもロングビーチ市の街角に建っていたことに驚きました。バスターミナルや大きなショッピングセンターの前、宮崎で言ったら、イオンや宮交シティの前に建っている感じです。交通の便も良く、相談にのってほしい人が気楽に入ることができることが素晴らしいと思いました。また、建物の中には、カフェレストランもあり、誰でも休憩したり、食事をとったりできるようになっていました。そこで働いている人もほとんどが当事者の方々でした。

スタッフとして活躍しているモリスさんがグループホームや地域のアパートを案内してくれました。この男性も元は患者の一人としてビレッジに相談に来ていた方でビルの清掃・修理の仕事を経て、今は当事者の方々の生活相談や自立支援の仕事をしているそうです。モリスさんは、夜中に不安で眠れずビレッジに助けの電話をかけてくる人が多いことを知り、眠れない時に集まって語り合う場があったらいいじゃないかと考え、夜中から早朝にかけてお茶を飲む会を作ったらどうかと発案し、大きな効果があったということでした。自分自身のつらい体験からどのようなサービスがあれば助かるかがよくわかっていたからこそできた企画ではないかと思いました。またそんな大胆なアイデアを実現させてくれるなんて素敵だなあと感動しました。

ビレッジに通う方々の手記の中に、面白い文章を見つけました。「ビレッジのスタッフは、たとえ自分が大統領になりたいといっても、絶対にそれは無理だ、などと言ったりはしない。そのような希望(hope)を持つのはとてもよいことだとみなし、そのために、今何ができるかと一緒に考えてくれるだろう・・・」というものでした。ビレッジでは、希望を持つことをとても大事に考え自分のやりたいことに取り組みめるように支援していました。たとえば、仕事を探すにしても、まずは簡単な作業から、と段階的に進めるのではなく、本当に自分のやりたいことができるように支えているのです。たとえば、ビレッジの各部門で当事者の方々も大勢働いているのですが、経理部で働いている人も数名いました。発病前にやっていた仕事が活かされているということです。また大切にしている考え方の中に、「失敗を恐れない」ということがあげられています。失敗しないようにすべてを整えようと周りが助けてあげるのではなく、失敗は成長と学びのチャンスになると信じて見守ろうという考えです。地域のグループホームなどで会った人たちの中には「公務員の仕事を二つ探したい」とか、自分の部屋がものすごく散らかったままなのに「生活を支援する仕事

がしたい」などと話す方がいました。それに対してビレッジのスタッフは、できていないところを指摘するのではなく「そんな希望が持てるようになったのは素晴らしいことだよ」と励ましていたのが印象的でした。その姿を見た時に、日本では、もっとよくならないと仕事は無理だとか、再入院やストレスがかかるのを避けようとして、家族や医療者が保護しようという考えがとても強いのではないかと感じました。慎重すぎて、かえって、自立にはマイナスになっているのかもしれないなあと感じたのでした。ビレッジにかかわる医師たちも、初めは仕事なんて無理、と言っている、その人たちが立派に社会で生活している様子を実際に見ることで、考え方が徐々に変わってきているということでした。やはり、当事者には力があるんだ、それを引き出していこう、というリカバリーの精神を大切にして、その力を社会に示していくことが大切なんだなあ、と改めて考えさせられた視察となりました。